四街道知ってるか?

～YOCCA ニュース5号(2014年7月発行)

Devon McNare(デヴォン・マクネア)

四街道を初めて訪れた人が必ず目にするものの一つに、駅を出てすぐ、北にまっすぐに伸びた道路沿いの古い松の並木がある。これが、松並木通り(Pine row road)である。

松並木通りは二つの理由で、私はいつも、なにか普通でないと思う。一つは、完璧にまっすぐであるということ。四街道の他の地域は曲がりくねった迷路のような道路が多いのに、である。
通りに関するもう一つのなぞはその樹齢や見かけの勇壮さにもかかわらず、実際、松並木通りはどこ…にもつながっていない。有名な寺院や神社につながる参道でもないし、四街道のどこかほかの街につながっているわけでもない。そして、商店街ですらない。四街道駅から真っすぐ北へ向かっているかと思うと、それはある地点で、急に方向を変え、だんだん細くなり、カーブして、最後には居住区域の前に一方通行道路となり消えていく。もし、この通りに特別な目的もないならば、どうして、そんなにたくさんの松の木で縁取られたのだろう、そして、それはいつのことなのだろう。

その謎を解くために、YOCCA の大胆不敵(!)探索チームと私は YOCCA 事務所に頭をそろえ、YOCCA 事務所隣の、教育委員会の社会教育課、文化財グループから何冊かの本をお借りして、通りの歴史についての何かヒントを得るために、古い地図を研究し始めた。
そこで、四街道が軍都だったころの地図の一枚にくぎ付けになった。そこには松並木通りにそっくり重なるかのように見える一本の細長い土地があった。それは時を1875年にさかのぼる地図で、四街道で一番古い地域のひとつだった。それはなんだろう?私たちは地図を穴が開くほど眺めまわして、いろいろなアイディアを寄せ合った。("あっ、飛行機の滑走路だ!""そうだ、それにちがいない。""ちょっと待って、1875年に飛行機はまだないよ。")文化財グループのスタッフが江戸時代の地図を出してきてくださったのだが、そこにも、まったく同じ形をした土地が同じ場所にあった。

それは砲兵場だった。
さらに調べてみよう。そうすれば、歴史がさらに形をくっきりと現すだろう。

1836年:佐倉藩は下志津原(現佐倉)にヨーロッパの大砲技術を学ぶための砲兵場をつくった。そして、大砲台の南三キロのところに的として大きな土の山を作った。その丘はルボン山と呼ばれ(フランスの大砲技術指導者の名前をとってそう名付けられた)今も、イトーヨーカドーの北に残っている。
1876年(明治):明治政府は砲兵場を広げて、さらに、陸軍の砲兵学校を設立した。
1894年:四街道駅が建てられた。そして、四街道は軍都として栄える。さすがに駅の方向に向けて、大砲を撃ち込むのは賢い方法ではないということになり、砲台を四街道にうつし、代わりに北へ向かって撃つようになった。砲兵学校はそれとともに、現在のイトーヨーカドーと下志津病院のところにうつしたのだ。

いま、私は、疑いの余地なくこう思っている。――――松並木通りは180年前の砲兵場の西のへりと完璧に一致する。でも、なぜ、松なのか。四街道市の文化財グループの人たちも、そのあたりははっきりとわからないという。でも彼らは加藤さんという1945年から、四街道に住んでいるという方を紹介してくれた。何十年もの間、軍隊の演習場としてしか使われておらず、荒れ果てた大地だった四街道を新しく農地として生まれ変わらせるために、彼は1945年に開拓民としてこの地にやってきた。

加藤さんなら、どのくらいの間、松の木がここにあるのか、なぜ植えられたのかなど、何かご存じだろう。

私たちは鹿放ケ丘ふれあいセンターに彼を訪ねた。四街道の歴史を物語る数々の遺物に囲まれた部屋で、加藤さんは、ときどきディスプレイの品を手に取りながら、言葉を選んで説明をしてくださり、私たちに2時間ほどの見学ツアーをしてくださった。"これは私たちが食堂で使っていた品々です。——茶碗、味噌汁椀、おかずを入れる皿です。こんなんじゃ、おなか一杯になんてならなかった。いつも私たちはおなかをすかせていました。"ここで、もっと、加藤さんの経験豊かなお話を書きたいのだけれど、それは書き切れないので、チャンスがあったら、ぜひ、鹿放ケ丘ふれあいセンターに行ってご覧になることを皆さんにお勧めします。

加藤さんは私たちに、貴重な情報をくれました。
＊松は、ゆうに樹齢100年は越えている。——加藤さんの予想では樹齢200年くらいだという。"松は、樹齢100年を超えるくらいから大枝が枝垂れはじめる。あの松は、私が四街道に来た時には、すでに枝垂れはじめていた。"四街道駅は今年祝120周年を迎えるが、四街道駅や、砲兵学校創立よりも何十年か前に植えられていた。
＊松並木の松が木材として今まで一度も伐採されたことがないのは軍の演習で幹が榴散弾や小銃弾でいっぱいで、木材として切り倒すことがあまりにも危険だからだ。
＊松の木は、本来は、駅から、今の大日交差点まで植えられていた。でも、嵐や、病虫害で少しずつ数を減らし、今あるものだけになったのだ。
＊北に向かって、左側の松の木は町の住民のための道にあり、これは通りの細い方の舗道または車道であり、今も現存する。右側の道は、石に縁どられ、軍隊使用にかぎられていた。

加藤さんに別れを告げ、四街道駅に向かいながら、私たちは砲台跡を探した。そこには何か記念碑のようなものがあるらしい。捜し歩いて、見つけたころには、あたりは暗くなり、写真を撮ることができなかった。四街道駅に向かってまた引き返しているときに、なぜ、この通りがこんなにもまっすぐなのかという謎が解けた。——砲撃練習の後、兵は馬に乗り、的までやってきたのだ——ルボン山まで、彼らの練習結果を知るために。私たちは、1830年代に兵たちがとったと同じように、同じまっすぐの道を車でたどってみた。通りは、佐倉との境界より少しばかり四街道側で始まり、そして、現在の通りの終わる地点——大砲の的（ルボン山—イトーヨーカドー近くの）が終点だった。のちに（ほんの少しばかり）通りは駅にまで伸びることになる。実際に、地図を間近で見ていただくと分かるが、イトーヨーカドーの北側のルボン山で、ほんの少しだけ、右に曲がっている。そして、ルボン山と駅をつなぐ道にはわずかばかりの角度がついている。

二つの疑問がクリアになった。なぜ、松並木通りはあれほどまっすぐなのか。
なぜなら、大砲の弾がまっすぐ飛ぶから。
その道はどこにつながるか。
大砲の弾が行く場所まで。

それでも、いまだにわからないことはある。いつ、なぜ、松並木が植えられたのか。加藤さんによると、1945年よりも昔に植えられていた。そして、1897年に四街道にうつされた砲兵学校よりも古いという。さらに、古地図には、陸軍砲兵学校と、的をも越えて植えられていた。砲兵学校の境界を美しく装飾する役割を担い、軍隊と市民との道路を分けていたにしても、北にそれほど伸ばす必要性はないではないか。
佐倉藩の砲兵場のできた200年ほど前には、松はもっと大雑把に植えられていたのだろう。そして、たぶん砲兵が砲弾の狙いを定める助けになり、あるいは住民が、間違って砲兵場に迷い込まないように注意を喚起する役割を持っていたのではないか。さらなる調査が必要だ。

（訳:米家靖子）